

「文明化された社会」をこえて —土木學のめざすもの—

Beyond Civilized Society : The New Aims of Civil Engineering Based on Historical Perspective

全国大会実行委員会学会誌編集部：高橋良和、岡本隆明、宇野宏司、岡田昌彰、坂下泰幸、野口恭平、松島格也、三木朋広

2022年の全国大会は、「文明化された社会」をこえて——土木學のめざすもの」をテーマに、京都市で開催される。文明化とは異なる視点の土木學の在り方を考えるために、この特集号では、急激に文明化が進められた明治・大正期ではなく、昭和初期に着目する。1914年、土木学会は東京に事務所を置いて設立され、当初より地方に支部を設けることができることが定款に明記されていたが、実際に支部が設置されたのは1927年の関西支部が初めてである。そして1937年から1941年にかけて各支部が設立され、地方を主体として土木学会の事業を実施する体制が整えられることと歩調を合わせ、1936年の役員会において、「東京その他大学又は専門学校所在地を選び毎年4月土木学会講演会を開くこと」が議決され、

第1回全国大会（年次学術講演会）が1937年4月、京都帝国大学を講演会場として開催された。

第1回全国大会には、全国から860余名が参加して93の講演がなされるとともに、京都および阪神方面の視察見学（表1）にも430余名が参加するなど盛況を呈した。この特集

号では、視察見学会に着目する。視察見学先には、明治以来進められた土木事業により文明化を目指した社会が、新たな課題を生み、改築・拡張が進められた事業が多く含まれており、視察見学先を、文明化を目指していた当時の視点と、2022年現在の姿と比較することで、文明化された社会以後の土木を考える上で参考になると考えるからである。

第1回全国大会における見学会について、まず土木史研究の視点により概観する。そして見学会視察先より、国道・港・浄水場・下水処理場・セメント工場を取り上げ、1937年当時および2022年の視点を紹介する。視察先であった京阪国道・阪神国道・神明国道は、大正時代に制定された国道2号の道路改良、バイパスの位置付けであったのに対し、現在はさらに第二京阪道路・第二阪神国道・第二神明道路事業が進められ、持続的に強化が進められている道路整備の現状を紹介する。江戸末期・明治初期に開港された神戸港・大阪港について、1937年時は港勢や市域の拡張に対応するため実施されていた修築事業を紹介するとともに、現在、

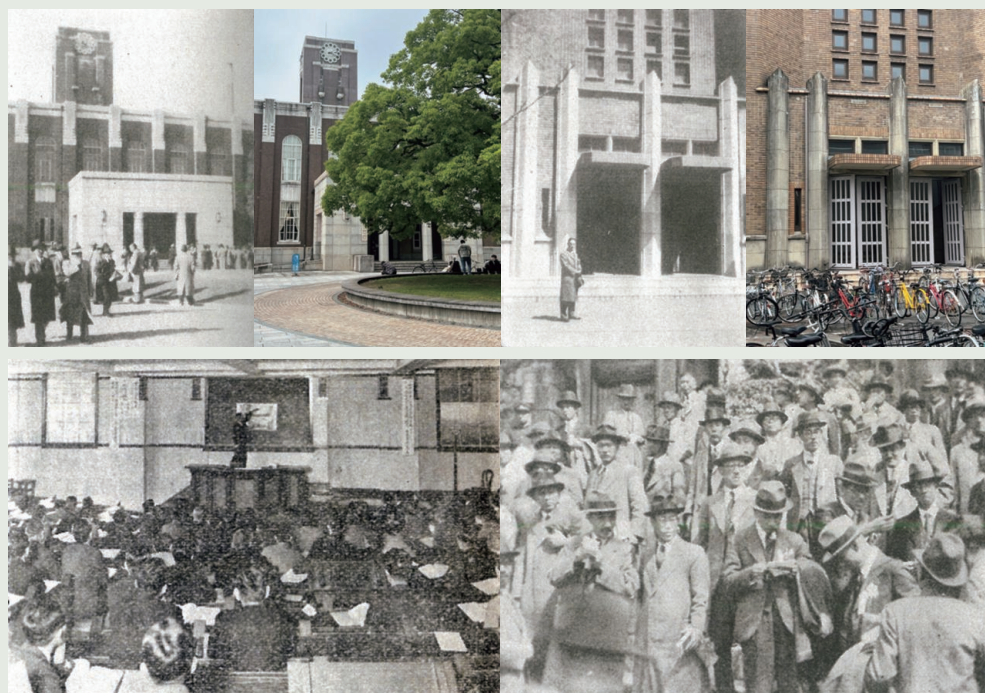


写真1 1937年第1回土木学会年次学術講演会の様子(白黒写真、参考文献(1、2))と講演会会場の現在(カラー写真)

表1 視察見学プログラム

▶1937年4月11日(日) 13～17時 京大図書館前集合	
A班	比叡山、大津方面(観光/雨天中止)
B班	八瀬、大原方面(観光)
C班	京阪国道、吉祥院下水処理場、蹴上浄水場、琵琶湖疏水インクライン
▶1937年4月12日(月) 9～17時 大阪市庁前集合	
大阪市御堂筋、地下鉄道、津守下水処理場、浅野セメント工場、大阪港、大阪北港、尼崎築港、阪神国道、神戸港、奥平野浄水場、神明国道	

ために拡張された1937年前後の浅野セメント大阪工場の状況について紹介するとともに、現在のセメント産業の置かれた状況や低炭素社会と資源循環に関わる取り組みについて紹介する。

また本特集では、文明化された社会以後の土木を考えるため、三つの視点を紹介する。三澤信吾氏(南禅寺塔頭正因庵住職)から、建設当時には反対の声も上がった一方で、現

在では京都の代表的な風景として定着している南禅寺境内にある琵琶湖疏水の水路閣について、南禅寺の立場から、古代中国の堯帝の逸話と土木との類似性など、興味深い観点が示された。前畑温子氏(産業遺産写真家)からは、産業遺産、土木遺産を巡るまち歩きを企画する経験を踏まえ、まち歩きをする際に大切にしている点を紹介され、土木遺産の魅力から地域全体の魅力へとつなげるヒントを紹介いただいた。磯田道史氏(国際日本文化研究センター)からは、歴史的観点から、土木と文明・文化・技術の関係や、土木技術の目指すべき方向や技術者の在り方について紹介いただいた。

本特集を通じて、文明化を支えてきた土木工学が、文明化された社会においてどう貢献するか、土木学が目指す方向性のヒントを感じ取っていただければ幸いである。

参考文献

- (1) 土木学会、第1回年次学術講演会記事、土木学会誌、第23巻、第6号、50～60頁、1937年
- (2) 土木学会、京都の講演と大阪の見学―土木学会第1回年次講演会―、土木建築工事画報、第13巻、第5号、254～258頁、1937年

2010年に国際コンテナ戦略港湾に選定された「阪神港」において取り組まれている先進的な事業について紹介する。明治期から給水が開始されていた蹴上浄水場・奥平野浄水場について、1937年時の大都市形成と水道事業の拡大を踏まえた考察を紹介す

るとともに、創設時の水道システムを後世に引き継ぎながらも、安全・安心な水道水の確保に務めている現状について報告する。吉祥院下水処理場・津守下水処理場について、1937年時の最新の衛生工学技術の粋を集めて建設された処理場であることを紹介

するとともに、現在では、既存施設の調査・維持管理による事業の継続と、流入量の増加・減少にともなう施設・処理機能の適正化などに取り組んでいることを紹介する。見学先の中で唯一の民間企業であったセメント工場について、セメント需要増加に対応する

ために拡張された1937年前後の浅野セメント大阪工場の状況について紹介するとともに、現在のセメント産業の置かれた状況や低炭素社会と資源循環に関わる取り組みについて紹介する。

また本特集では、文明化された社会以後の土木を考えるため、三つの視点を紹介する。三澤信吾氏(南禅寺塔頭正因庵住職)から、建設当時には反対の声も上がった一方で、現